

黒上正一郎著 『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』

—— 班別輪読のための導入講義 ——

九州造形短期大学教授
国民文化研究会副理事長

小柳陽太郎

一、聖徳太子研究の意義

(一) 外来文化との接觸交流の中で

—— 聖徳太子の時代についての解説（二八四頁） ——

(二) 聖徳太子が身を以て示されたものは何か

—— 聖徳太子の體驗過程（一一頁） ——

日本書紀 推古天皇二十九年

春二月己丑の朔にして癸巳の日（二月五日）、半夜に廐戸の豊聰耳の皇子の命、斑鳩の宮に薨りたまひき。この時、諸王諸臣また天の下の百姓、悉に長老は愛兒を失へるが如く、塩酢之味口にあれども嘗めず、少幼き者は慈しき父母を亡へるが如く、哭き泣ちる聲行路に満てり。すなはち耕す夫は耜を止め、春女は杵せずして皆曰はく「日月輝を失ひて天地既に崩れぬべし。今ゆ後誰をか恃まむ」といひき。この月、上の宮の太子

を磯長の陵に葬めまつりき。この時に當りて高麗の僧惠慈、上の宮の皇太子薨りましぬと聞きて大く悲みて、皇太子のために僧を請せて設齋しき。仍りてみづから經を説く日に、誓願ひて曰はく、「日本の國に聖人ましまし、上の宮の豊聰耳の皇子と曰す。固に天に縦さえたり。玄聖の徳を以ちて日本の國に生まれまし、三統を苞ね貫きて先聖の宏なる猷を纂ぎ、三寶を恭敬ひて黎元の厄を救ひたまふ。これ實に大聖なり。今太子既に薨りましぬ。我異し國といへども心は断金にあり。それ獨生けりとも何の益かあらむ。我來年の二月の五日を以てかならず死なむ。因りて上の宮の太子に浄土に遇ひまつりて、共に衆生を化さむ」といひき。ここに惠慈、期りし日に當りて死にき。この以に時の人彼此共に言はく、「それ獨、上の宮の太子の聖にますのみにあらず、惠慈もまた聖なりけり」といひき。

(三) 憲法十七條について(二二四頁)

イ 第一條(六三頁など参照)

ロ 第十條(五五頁など参照)

(四) 三經義疏について

イ 維摩經・文殊問疾品(六一頁)

經典「設身ニ苦有リトモ惡趣ノ衆生ヲ念ジテ大悲心ヲ起ス。」

吉藏菩薩(隋)義疏「我功德智慧の身あるも、既に尚苦痛是の如し。況や惡趣の衆生の苦を受くる、無量なるをや。故に悲を起す。」

太子義疏「大士は其の身の苦を忘れて苦を同じうして化することを明かさなり。此の句は悲能く苦を抜くことを明かす。」

口 勝鬘經・攝受正法章 (一六六頁)

經典「攝受正法ノ善男子、善女人ハ攝受正法ノタメニ三種ノ分ヲ捨ツ。何等ヲカ三トナス。謂ク、身

ト命ト財トナリ」

太子義疏「舊ふるき人釋はなすらく、身を捨すとは自ら放はなに奴と爲るを謂ひ、捨命とは人の爲に死を取るなりと。今云く捨命と捨身とは皆是れ死なり。但たゞ、意を建つること異なるのみ。若し身を餓虎に投ずるが如きは、本、身を捨つるに在り、若し義士危きを見て命を授くるは、意こころ、命を捨つるに在りと。捨財とは、謂へらく身外の物なり。」

○

孝明天皇御製

澄ましえぬ水にわが身は沈むとにもごしはせじなよろづ國民

今上陛下、終戦後の御製(三首のうち)

爆撃にたふれゆく民のうへをおもひいくさとめけり身はいかならむとも
身はいかにもいくさとめけりただたふれゆく民をおもひて

二、著者(黒上正一郎先生)の研究態度

学術的研究の著作、また宗教的信仰の表白といへども、それが切實深刻の人生観を内容とするときは必ずそこに芸術的表現の性質を伴ふのである。故に太子御著作の研究は、単に語義の訓詁、また教義の解説に依つてのみ之を成就せらるべきではない。國民的憶念の信に基きてその御言葉の微妙の脈絡に心的内容を洞察し、此にこれらの知的作業を統一することに依つて始めて到達せらるべきである。(一七二頁)